

別 紙

米沢藩上杉砲術について

(概要・特色)

鉄砲（火縄銃）は、天文12年（1543）に種子島に漂着したポルトガル人によって日本へと伝えられたとされている。足利将軍家に献上されるなどした一方で、その威力に目を付けた織田信長をはじめとした戦国大名は鉄砲の導入を進めた。上杉謙信も鉄砲の導入に力を入れたと伝えられ、その後の上杉景勝・直江兼続も先進地から鉄砲

職人を招聘して鉄砲を製造した。兼続が鉄砲を製造したと伝わる白布温泉には直江

じょうしゅうこうてつぽうたんぞう

城州公鉄砲鍛造遺跡之碑が建つ。兼続の整備した鉄砲が威力を發揮したのは、慶長19年（1614）の大坂冬の陣であり、その後も幕末に至るまで米沢藩の藩士たちは鉄砲訓練に励み、正月に藩主の前で披露する鉄砲上覧は藩士にとって重要な晴れ舞台であった。

戦国期から江戸初期には、上杉家及び米沢藩へは岸和田流・田付流・種子島流・稲富

流などの砲術流派が入り、江戸中期にも逸韓流・武衛流・森重流（中島流）などが伝えられた。その中で米沢藩の主流砲術となったのは種子島流と稲富流であったといい、幕末まで伝承されている。各流派は競って稽古に励み、鉄砲上覧や演習等でその技を披露した。嘉永6年（1853）のペリー来航以降、米沢藩では洋式銃隊と大砲を整備したが、明治元年（1868）の戊辰戦争時には整備した洋式銃とともに30匁火縄銃の大筒が活躍したという。

明治維新後には鉄砲訓練も次第に途絶えたが、明治38年（1905）の旅順陥落祝勝会での甲冑行列と川中島模擬戦において砲術披露が行われたことをきっかけに、旧藩

士を中心に米沢藩の砲術を伝承する尚武要鑑会が結成された。以後、上杉神社例大祭などで発砲演武が行われるようになり、大正14年（1925）の皇太子（昭和天皇）の米沢行啓の際にも披露された。昭和になると、上田・長野・春日山・高田・新潟など上杉家ゆかりの各地で発砲演武が行われている。

その後、第二次大戦での一時中断を挟み、昭和30年（1955）に米沢尚武要鑑会が再興され、昭和36年（1961）に上杉藩火縄筒保存会稲富流砲術隊となり、秋田国体をはじめ、東京オリンピック・札幌オリンピックなど本格的に全国各地で発砲演武を披露することになる。昭和43年（1968）12月には同じく尚武要鑑会の系譜を引く上杉砲術隊が新たに発足し、2隊の砲術隊が米沢において活動することになった。昭和54年（1979）、上杉藩火縄筒保存会稲富流砲術隊は米沢藩古式砲術保存会と改称し、現在に至っている。

米沢藩古式砲術保存会は、毎年5月3日の米沢上杉まつり川中島合戦をはじめ、愛知県新城市の長篠合戦のぼりまつり、新潟県上越市の謙信公祭、山梨県笛吹市の石和桃の花まつり、新潟県南魚沼市の六日町長尾政景公墓前祭、鹿児島県西之表市の種子

島鉄砲まつりなど全国で発砲演武を披露している。上杉砲術隊は、上杉神社・松岬神社の例大祭と毎年5月2日の米沢上杉まつり武禘式を中心に発砲演武を披露している。

発砲演武には、両団体ともに米沢藩に伝わる10匁から30匁の火縄銃の大筒を用い、基本的な立ち射ちと膝射ち、腹ばいの体勢での這^はい射ち、また、集団で発砲する一斉射撃や三分隊による段射ち等があり、いずれも実戦射法である。砲術隊の移動時や儀式などの際には、陣羽織と陣笠、甲冑等の装束を着用し、米沢藩以来の実戦的な様式を踏襲している。

なお、発砲演武でも使用されている宮坂考古館所蔵の火縄銃（30匁筒）8挺は、江戸時代当時のものであり、昭和55年（1980）に市指定有形文化財（工芸品）として指定されている。その他の鉄砲も江戸時代に実際に米沢藩で使用されていた10匁から30匁の火縄銃が用いられ、米沢藩上杉砲術の大きな特色をなしている。さらに宮坂考古館には明治期の尚武要鑑会の貴重な記録が残されており、各隊の結成以降の記録も残っている。

（指定の意義）

火縄銃は、ポルトガル人による種子島への鉄砲伝来という出来事に端を発するが、火縄銃とその砲術は当時の歴史情勢等を学ぶきっかけを与えてくれる。また、火縄銃と砲術が中世から近世へと続く社会にどのように定着したのかを知ることは、日本史のダイナミズムを知ることにつながり、米沢藩の政治情勢への関わり方や、藩の政治理念・方針等を理解する手がかりともなる。さらに砲術という武芸は、技術を支える心身鍛錬・肉体や精神の形成を根底にもち、それを知ることは伝統的な日本人の精神や文化を窺い知ることに繋がっていく。

米沢藩上杉砲術を伝承する2つの隊は、ともに米沢藩と尚武要鑑会の流れを汲む伝統的な火縄銃と砲術を継承している。江戸時代に実際に使用されていた米沢藩の特徴的な30匁筒をはじめとする大筒の火縄銃を用い、訓練により伝統的な砲術を体得し、半世紀以上にわたって米沢はもとより全国各地の様々な行事・イベントで発砲演武を行ってきた。現在では全国に数多くある砲術隊の中でも設立が最も古く、草分け的な存在であり、その歩みは戦後の火縄銃・砲術の歴史を象徴するものである。

以上のように、米沢藩上杉砲術は、米沢藩の火縄銃と歴史的武芸である砲術を継承してきたという地域的特色を有し、日本の火縄銃・砲術の歴史を知る上でも重要である。また、今後も火縄銃の発砲演武を伝承披露していくことを願うものである。

なお、米沢藩古式砲術保存会と上杉砲術隊は、米沢市最大のイベントである米沢上杉まつりで発砲演武を披露し、「上杉の雷筒^{らいづつ}」と形容される迫力と轟音で多くの観客を魅了している。今回の文化財指定により、米沢藩上杉砲術をこれまで以上に地域文化として国内外に広く知らしめる契機となるものと考えられる。

米沢市無形民俗文化財「米沢藩上杉砲術」保持団体

1 米沢藩古式砲術保存会

- (1) 種 別 無形民俗文化財
 - (2) 所 在 地 米沢市東一丁目 2 番 24 号 (宮坂考古館内)
 - (3) 設立年月日 昭和 36 年 (1961) 4 月 29 日
 - (4) 代 表 者 会長 宮坂直樹
 - (5) 会 員 数 40 名
 - (6) 主 な 活 動
 - 昭和 43 年～ 毎年 5 月 長篠合戦のぼりまつり 愛知県新城市
 - 昭和 48 年～ 毎年 5 月 米沢上杉まつり川中島合戦 山形県米沢市
 - 昭和 56 年～ 毎年 8 月 謙信公祭 新潟県上越市
 - 昭和 59 年～ 毎年 4 月 石和桃の花まつり 山梨県笛吹市
 - 昭和 60 年～ 毎年 7 月 六日町長尾政景公墓前祭 新潟県南魚沼市
- < 由緒、沿革等 >

米沢藩の砲術の歴史を継承する しょうぶようかんかい 尚武要鑑会が明治 38 年に結成され、火縄銃の発砲演武が行われるようになった。第二次大戦での一時中断を挟み、昭和 30 年に米沢尚武要鑑会として再興されると、昭和 36 年に上杉藩火縄筒保存会 いなとみ 稲富流砲術隊が結成され、昭和 54 年には現在の名称である米沢藩古式砲術保存会に改称した。

上記の主な活動のほか、東京オリンピック・札幌オリンピック・国体・ジャパンウィーク (フランス・スペイン・ポルトガル) 遠征等、国内外で発砲演武を披露している。



米沢上杉まつり川中島合戦での発砲演武

2 上杉砲術隊

- (1) 種 別 無形民俗文化財
(2) 所 在 地 米沢市丸の内一丁目 4 番 13 号 (上杉神社社務所内)
(3) 設立年月日 昭和 43 年 (1968) 12 月 1 日
(4) 代 表 者 隊長 伊藤利雄
(5) 会 員 数 30 名
(6) 主 な 活 動
毎年 4 月 上杉神社・松岬神社の例大祭 山形県米沢市
毎年 5 月 米沢上杉まつりぶていしき 武禘式 山形県米沢市
毎年 10 月 あがの市民交流まつり 新潟県阿賀野市
その他、これまで出羽三山大祭・藤岡市上杉サミット・松本市砲術隊交 流・
愛宕神社火祭・新潟戊辰の役記念碑除幕式・綱木川ダム定礎式・全国青年会議所
山形大会・長谷堂合戦四百年祭などで発砲演武を行っている。

< 由緒、沿革等 >

上杉砲術隊は、しょうぶようかんかい 尚武要鑑会の系譜を引き継ぎ、「砲術の伝承・藩祖の偉風を共に伝え尚武の鑑照し青少年の志気振興に資し併せて上杉・松岬両神社に奉仕し郷土の発展に寄与する」(隊則第 2 章第 4 条) ことを目的に結成された。上杉神社社務所内に事務局が置かれ、昭和 43 年の結成から現在に至るまで定期的に上杉神社例大祭や、米沢上杉まつり武禘式で発砲演武を披露している。



米沢上杉まつり武禘式での発砲演武